

曾我部小学校におけるインターナショナルセーフスクール活動

執筆：曾我部小学校 前校長 俣野 弘和
同校教頭（前 ISS 担当主任）平井眞理子

1. インターナショナルセーフスクール（ISS）着手の経緯

1-1. 曾我部小学校が ISS に取り組む動機

亀岡市はセーフコミュニティ推進のまちである¹。安心安全なまちづくりを一層進めるために、インターナショナルセーフスクール（International Safe School: 以下「ISS」とする）の認証を取得し学校にも広げたいとの思いがあった。教育委員会から本校に打診があり、ISS の趣旨と私自身の問題意識が重なり、取り組みを進めることで学校づくりに生かそうと考えた。

1-2. なぜ、ISS に取り組んだのか

曾我部小学校が ISS に取り組んだ理由は、大きく次の 2 点にある。

①「安心安全=いのちの尊重」は自立のための能力として必要だと思うこと。

（今日の子どもを巡る状況を見たとき、安心安全について学ぶことが生きていく上で土台となること。）

②取組により学校の現状を変えること

（全校で価値あることに取り組むことで、学校全体で大きな取組みを進め誇りや自信の持てる学校に変革すること）

当時の本校の児童の状況をみると、行動に落ち着きがなく、学習に十分集中できず、ルールが守れず乱暴な言動でトラブルも多かった。また、保護者からのクレームも多く、学校の対応も受け身にならざるを得なかった。

こうした状況を打開するためには、「国際基準の日本でまだ 3 校しかない素晴らしい学校をつくる」という、大きな目標を前面に掲げることで、学校変革のうねりを作り出すチャンスととらえた。

具体的には、次の点を追求できるのではないかと考えた。

¹ 京都府亀岡市は、2008 年 3 月に日本で初めてセーフコミュニティ（SC）として認証され、2013 年に再認証されている。SC とは、1980 年代から WHO（世界保健機関）が推奨している「（体や心の）けがは予防できる」という理念に基づいた安全なまちづくりの取組みである。地域の協働によりエビデンス（根拠）に基づいて地域の安全課題への対策を講じ、その成果を検証する取組みで、7 つの指標に沿った取組みを進める。7 つの指標を満たしていることが認められると SC として認証される（5 年ごとに再認証）。インターナショナルセーフスクール（ISS）は、その学校版であり、8 つの指標（SC の 7 指標に加えて、「SC との連携」という指標が 1 つ加えられている）にそった安全な学校環境づくりを進める。

1. 安全教育に全面的に取り組み、いのちの尊さが教えられること
2. 教職員に学校改善の具体化を明確に示し、一致した取組ができること
3. 児童のけがやトラブルを防止し、ルールの徹底を図り、落ち着いた環境を作り出せること。このことにより、仲間意識の向上、保護者の学校への意識も変わることを。
4. 国際的な目標に取り組んでいるということで、地域との協働を広げられること

1-3. ISS に取り組むにあたって

ISS に取り組むにあたって心配となったのは、教育現場においては、根拠（エビデンス）を明確にした取組は少ないため、過去のデータの活用や数値化等が現在の取組と結びつけることができるか、という点であった。また、取組が8指標に縛られると、柔軟な取組ができないのではないかという不安もあった。

2. ISS 活動の推進

2-1. 地域や保護者との連携のための工夫

取組の推進には、保護者と地域住民の ISS への理解と協力がポイントだと考えた。そのため日本でも数少ない国際基準の学校づくりにチャレンジしていることを前面に打ち出し、次の取組を行った。

- ①ロゴマークの活用
- ②取組における協働の工夫
- ③各種団体会議、区長会議、PTA 会議等での協力をお願い
- ④学校便り、ホームページ、ISS ニュース等での広報

など、あらゆる機会を通して理解と協力を求めながら学校の取組を浸透させていった。このような取組を積み重ねた結果、地域防災訓練や通学路の見直しを自治会と合同で実施することができたのは、地域との協働の成果である。



2-2. 学校行事や諸活動の中に溶け込ませるための工夫

教育活動に ISS を工夫して位置付け、教師の取組み量と負担感を軽減するようにした。学校組織の中にある生徒指導、特別活動、学校行事や委員会活動等、ISS の観点で見直しを進め、「子ども発」を大事にしながら主体的な取組になるようにした。取組みには、I（あい）ちゃん、ISS 憲章、ISS の歌を活用し、いろんな活動が ISS につながっていることを印象付けた。

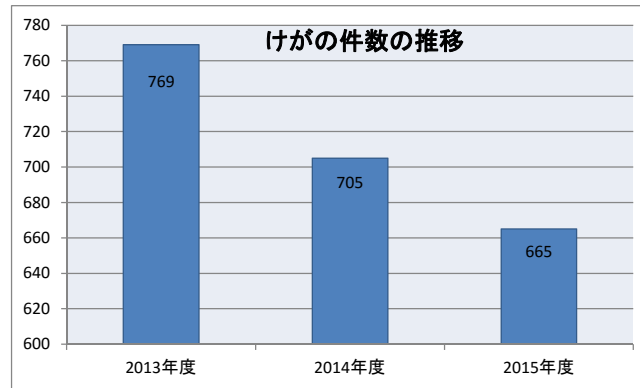
3. ISS による変化・成果

ISS が目指すのは、不必要な体と心の「けが」の発生を予防することで、子どもや教員などの健やかな日常を確保することである。曾我部小学校においては、ISS 活動を推進するなかで、以下の変化がみられるようになった。

3-1. 身体面の変化

まず、体のけがの発生件数をみてる。ISS 活動を進めてから、けがの総数は年々減少している。特に、2014 年度からは軽微なけがもすべて含めて記録するようになったが、それでもけがの件数は減少している（図 1）。実際、ISS 取組み前（2011 年度 4 月～1 月）の 833 件と比べると約 35%の減少がみられる。また、病院への搬送を必要とするけが（事故災害）においても年々減少し、長期の治療を要す大きなけがも少なくなっている。

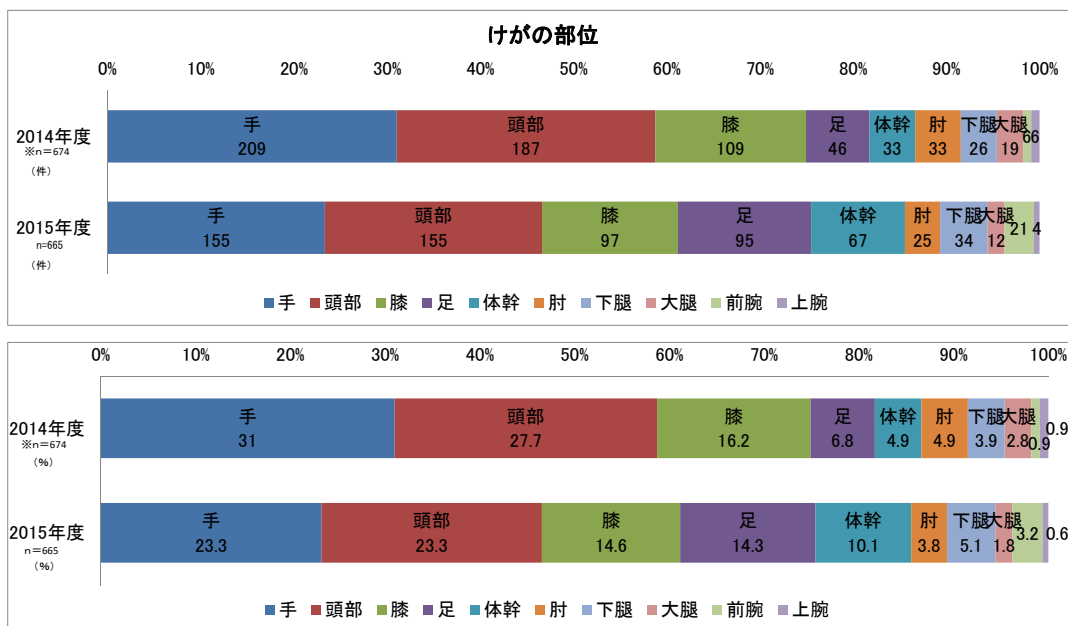
図 1 児童のけがの発生件数の推移



出典：保健室来室記録

さらに受傷の部位をみると、2014 年度に最もけがの件数が多かった「手」「頭部」「膝」については、2016 年度にはいずれも減少している（図 2）。特に、本校の課題であった頭部（首から上のけが）のけがが減少している。そのなかでも、重傷化する可能性の高い（顔面を除く）前頭部や後頭部のけがについては約 20%減少している。

図 2 受傷の部位²

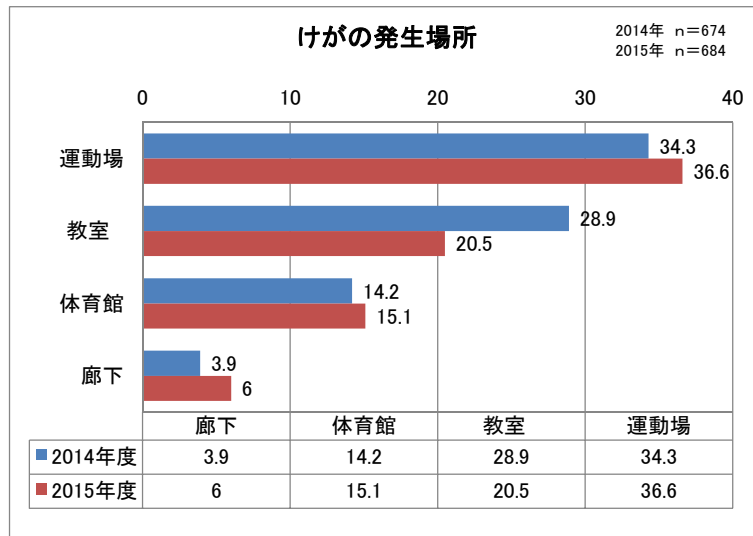


出典：保健室来室記録

² 2014 年度については、総数 705 件から継続して処置をした 31 件をひいている。705-31=674 件

次に、けがの発生場所別をみると、2014年度と比較して、2015年度には運動場での発生割合は若干増えているものの、教室でのけがの割合が大きく減少している（図3）。その背景として、児童自身が気を付けるようになったこと、委員会活動の中で安全点検を継続し、けがに結びつかないよう教室環境を児童と教師が一緒になって整えてきたことが考えられる。

図3 けがの発生場所（％）



出典：保健室来室記録

児童のけがやその原因となる事故に対する意識の変化をアンケート調査結果からみると、2016年2月には「事故やけがに合わないよう気を付けている」「命を大切にしている」「決まりを守っている」と答えた児童がいずれも約95%みられた（図4、図5）。

図4 けがに対する意識

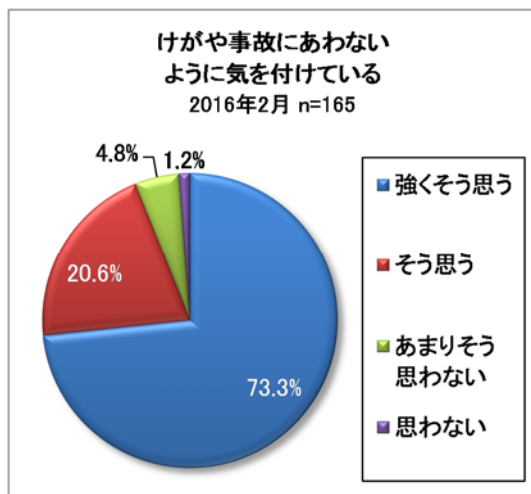
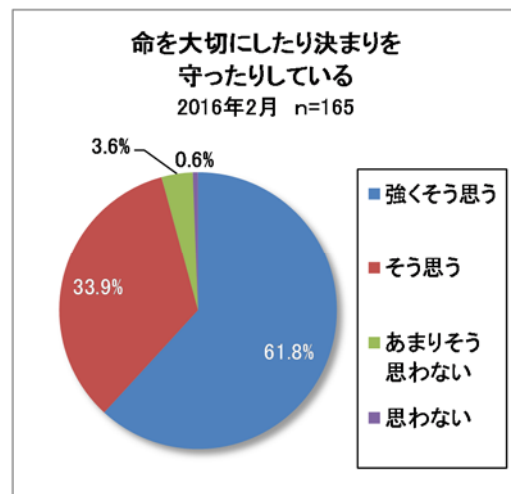


図5 規範意識



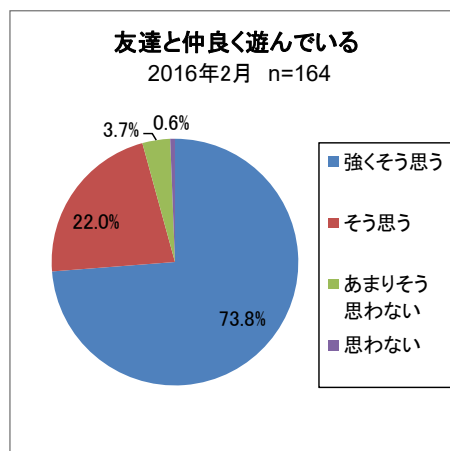
出典：児童アンケート

3-2. 精神面における変化

2016年の児童へのアンケート調査の結果を見ると、96%の児童が友達と仲良く遊んでいると答えている(図6)。また、いじめの認知件数においても、2014年7月と比べて減少しており、友達間の大きなトラブルも発生していない。これらは、いじめ防止フォーラムや異年齢集団活動、安心できるクラスづくりといった取組みが、児童の心の安定につながったからではないかと考えている。



図 6 友だちとの関係



出典：児童アンケート

3-3. その他の面での変化

上記のように児童間のトラブルやけがが減少したことで、子どもたちは落ち着いて学校生活を送ることができている。本校では、安心安全な学校づくりがすべての教育の基盤となり、学力の向上につながると考えている。実際、京都府の学力診断テストや校内の学力テスト等の結果を見ると少しずつではあるが学力の向上が見られる。また、数字では表せないが、学習に対する意欲や集会等多くの人の前で話す力や聞く態度が身につけてきていると実感できる。

4. 取組みを振り返って

4-1. 学校(教員)にとって大変だったこと

学校現場においては、児童の変化を数値化し客観的なデータとして指導にあたることがあまりない。子どもの変化をどういう観点でどのように測るのか、けがのデータと児童の行動をどう結びつけていくのか、という点が難しかった。また、卒業、入学と年々児童が変わるとともに児童自身が心身ともに成長過程にある。「けが」の発生に着目しても、成長に伴うものなのか、経験不足、筋力不足等の児童の課題なのか、児童の行動に原因があるのかその判断によって対策そのものが変わるため、その見極めが難しい。しかしながら、データをも

とに本校のけがの実態をどう分析するのかを養護教諭を中心に職員間で議論できたことは共通理解を図り、共通の目的意識を持たせたことから、非常に価値あることであったと思う。

4-2. 心に残っていること

これまでの ISS 活動を振り返ってみると、ISS のロゴマークや歌、憲章などから取組みがスタートし、教師や子どもたちの手によって一つ一つ積み上げられてきたこと、その中で子どもたちのがんばっている様子や先生方の工夫や熱意のこもった取組みが心に残っている。

地域には「こども 110 番のいえ」のステッカーが家の軒先にかかり広がったこと。「I (あい) ちゃんパトロール隊」のステッカーを付けた自転車や車が往来するなど、地域の防犯意識の向上にも一役買っているようにも思える。さらに、下校中に用水路に落ちた児童を子どもたちが 110 番の家に駆け込み助けていただいたことは、実施した訓練が実際に活かした形となった。

この 3 年間にわたる取組みを通して学校は大きく変わってきた。何よりうれいしいのは、子どもたちの変容である。行動に落ち着きが出てきて、子ども同士のトラブルもほとんどなくなり、互いを認めあうことができるようになった。授業についても、教師の話をきちんと聞いてがんばって勉強するようになり、自主的に家庭での学習に取り組む児童が増えてきた。

また、保護者からの学校に対する物言いが柔らかくなり、クレームがなくなったこともうれしいことである



5. 今後の展開について

ISS として新たな一歩を踏み出した今、再認証に向けてどのように取組みを進めるかが課題となる。新年度になって教職員の異動などによって取組みの体制が変わるなか、ISS の理念やモチベーションの維持、課題の明確化が必要になると思っている。加えて、次へのチャレンジとして、安全教育 (ISS) の総合的なプランをつくりたいと考えている。

今後、新たに ISS に取り組む学校に対して、自分たちの経験から伝えたいことは、ISS は「認証を受けること」が目的ではないということである。あくまで、学校の課題解決のためにその方策として ISS に取り組むことが大切だと思っている。ISS 活動は、子どもたちの変容と成長、教職員の指導力と教職員体制の強化、地域や保護者等の協働と信頼に必ずつながると感じている。